

歴史紀行

なごや

幻の古代道路を追って

池田 誠一

■【6】 つづいていた直線…古渡から御器所へ ■

1 東南への道

古渡から先の古代道路については、あまり議論されたものはありません。次の両村駅は、名古屋市の東南部から豊明市、東郷町にまたがるエリアが候補となっていますが、その間の15*ほどの区間はどこを通過していたのでしょうか。

経路として考えられるのは、一つは南に曲って熱田社に向かうことです。熱田社は当時すでに宮と呼ばれる有名な社でした。しかしそこはまだ半島状に海に囲まれていたと考えられ、古代の幹線道路がわざわざ廻りこんでいたとは考えにくいのです。となると、残るのはそのまま東ないし東南へ向かうことでしょう。その先は、地質的には大曾根凹地といわれ、侵食されて北から南にかけて低くなっています。古渡の東はその低くなった所、精進川と呼ばれる川の流れていた低地帯になります。

2 精進川の低地帯

(1) つづいていた？直線の道

実は、前々回に紹介した木下氏の直線道路説では、露橋からも東に2.5*と指摘されており、その区間は熱田台地の東側まで延びていました。明治の地図で確認すると、台地の東側にも精進川にむけて道路が延びているのが分かります(図1)。

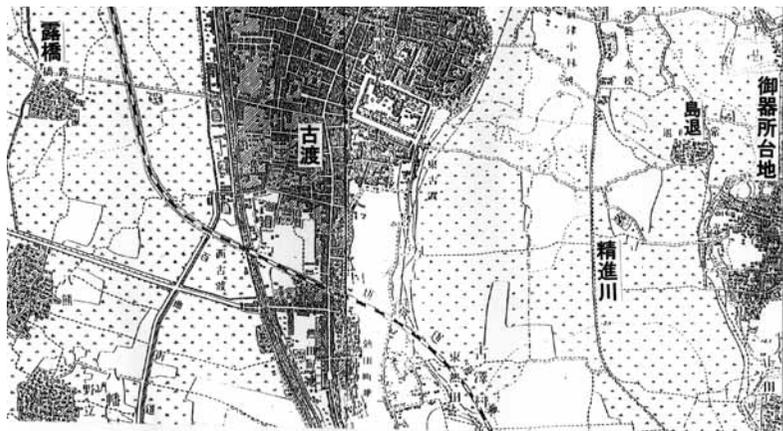


図1 熱田台地を越えてつづく直線の道

もうすこし細かく見てみると、熱田台地の
上は、西側にはそれらしい道が残りますが、
東側は古渡城(現・東別院)築城で壊れたので
しょうか、直線道路跡と考えられる道はあり
ません。ところが台地を越えた東側には、明
治の地籍図では帯状の土地は見られないもの
の、まっすぐな道は続いているのです。

現在の地図でチェックすると、東別院交差
点の東側200[㍓]付近に、南に入りすぐ東に曲
る細い道があります。いかにも旧道のように
細かく曲りつつ、ほぼ東南東に新堀川まで300
[㍓]ほど続いています。定規を当ててみると、
露橋から東に進んだ直線の道は、熱田台地
の上でわずかに方向を変えてはいますが、細い
道は、ほぼその延長上に乗ってくる道なの
です。この道はいったいつ頃からあったので
しょうか。

熱田台地上の道路や土地区画は、戦国時代
から江戸時代の城造りや町並形成で改変され
ているのでしょうか。ところが、それを飛び越
えて直線の道が続いていたとなると…、それ
は中世以前の相当古い道を意味するとも考え
られるのです。

(2)「古渡河」

ではその先の精進川の低地帯は、古代はど
のようなものだったのでしょうか。少し下流
になりますが、11世紀に熱田神宮の宮司が宮
の東側に築堤して館を構え田島氏となったと
いう記録があります。付近はまだ海の状態で
残っていたようです。

また少し後の1300年代ではありますが、当

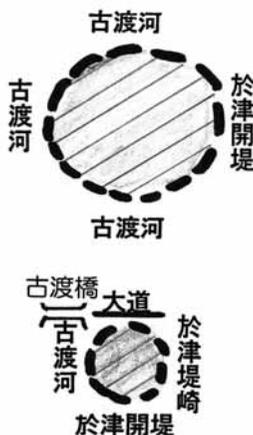


図2 古渡河付近の土地の四至。
河の曲りと大道の位置関係

時の土地の契約文書の中に「古渡河」という固
有名詞が登場します(文献1)。文書は2つあ
って、共に土地の東西南北の限界を示してい
ます。一つは、大宅郷の土地1町で、

「東を限る於津開堤 南を限る古渡河
西を限る川河 北を限る岡河」と。

いま一つは、古渡橋詰の土地3反で、

「東を限る於津堤崎 南を限る岡堤
西を限る古渡河 北を限る大道」です。

誤字のようなところも見られますが、2つ
には共通事項が多く、そこから分かることは、

- ①古渡河は蛇行しており東と南には堤があ
ったこと、
- ②古渡橋があり、東西方向に「大道」(当時
の街道)が通っていたことです(図2)

古渡の東側は標高5[㍓]弱です。古代でも、
およそこれらに近い状況だったのではないで
しょうか。

(3)再び直線の道

先ほど追っかけてきた新堀川までの直線の
道は、現在ではさらに川を越した東側にもつ
づいていました。今では「都島(つしま)通」と
呼ばれ、東南東にまっすぐ御器所台地へと伸
びています。東西と南北の市街地が形成され
ている名古屋で、なぜこのような斜めの道が
できたのでしょうか。調べてみると大正時代
の地図にはこの直線道路が確認でき、当時の
耕地整理でできたと考えられるのです。

どこまで行くかを見ると、道は御器所台地
を駆け上ります。さらに郡道を越えて台地東
部の石仏付近まで、ほぼ東南東につづき、そ

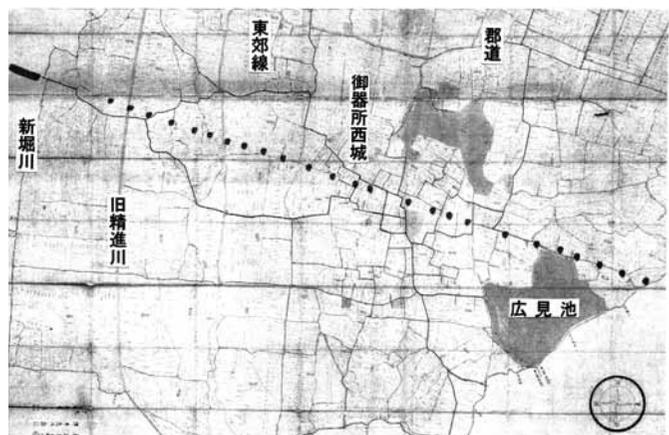


図3 明治の御器所村の地籍図にみえる直線の道跡。左上から東南東に。
途中、台地の入口部分の直線がとんでいる

の後東に向きを変えています。しかし明治の地籍図で確認すると、低地帯西側の平坦な部分には直線の道が認められますが、台地の手前からなくなっているのです。御器所台地のこの延長線上には、中世末、御器所西城と御器所東城と呼ばれる城が造られており、当然土地の区画も変更されたでしょう。ところが直線の道は、それを越えて台地の中央部まで伸びているようにみえるのです(図3)。ここも熱田台地と同じように、中世の遺跡をとび越えて道が続いていたのでしょうか。

3 紀行 御器所台地に向けて

… 低地帯から台地へ …

それでは古渡から、「古渡河」が流れていたという低地帯を通して御器所台地へと、直線の道を辿ってみましょう。

〈精進川の低地帯〉

地下鉄の名城線東別院駅の2番出口を出て、広い山王線を東に進みます。道は台地を下って低地帯に入っていくのが分かります。

少し行った右側に、入ってすぐ突き当たり左に曲るおかしな道があります。本来は広い道と斜めに交差するところを途中で折ったような道です。入って左に曲ると、道はくねく

東別院駅から山王線を下る。熱田台地から精進川低地へ5〜8分くらい下っている



直線道路の跡と考えられる道。すこしずつ曲りながらつついている



精進川は大正時代に運河化されて新堀川になった。右側にJR中央線が通っている



鉄道ガードから東南東にまっすぐつつづいている都島通。江戸時代は登城街道ともよばれたという

ねとはしていますが、ほぼ東南東に伸びています。この道が先ほどの露橋からの直線道路の延長部ではないかと考えた道です。その道を進むとすぐ新堀川の側道に飛び出します。右側には高架のJR中央線と広い側道が見えます。

この新堀川は前身の精進川を明治の末に運河化したものです。運河化の構想は江戸時代にもあって、それだけ海面との水位が小さいことを意味しています。内田橋を渡り、鉄道の側道を横断してガードを潜ると、その先は都島通です。通りは精進川の低地を東南東にまっすぐに伸びています。「古渡河」はこの辺りを西に東にと蛇行しながら南へと流れていたのでしょうか。まっすぐ進むと高架道路の通る東郊通です。

〈御器所台地へ〉

道は、広い通りを越えてまっすぐに御器所台地を上っているのが分かります。東郊通を渡った左側は「島退(しまのき)」とよばれた地域です。付近がまだ海だったときに島だった所とされ、地名は「島の木」だという説もあります。

御器所台地は、この付近では精進川低地に対して10分程度の段差があります。都島通から

東郊通を横断して台地上っていく道



東に続く坂を上ります。少し行くと左側の道が少し奥まった所に尾陽神社の鳥居と石段が見えます。この神社は大正時代にできたものですが、その前は戦国時代に造られた城郭跡です。西北方向にはガケになっており、東北方向には堀の跡も残ります。戦国時代に活躍した佐久間氏の居城で、御器所西城と呼ばれています。この付近には台地を上っていった坂のピークにも御器所東城があったとされます。御器所台地は、中世は精進川低地や鎌倉街道を見張る拠点だったようです。

まっすぐな道の右側にも気になる史跡があります。尾陽神社の反対、南にある村雲小学校付近は、7世紀のものとする布目瓦を出



尾陽神社。戦国時代は佐久間氏の居城だった

坂道のピークの御器所東城の辺り。この先を下ると出口町になる



浄元寺前の坂道。この坂を上った付近に極楽寺があったとされている

土した極楽寺があったとされます。またその東には、9世紀に熱田神宮と関係があった神宮寺の記録があり、これも古代道路の時期になります。こう見てくると、決定的なものはありませんが、なにか古代から中世にかけての道が通っていたと思わせてくれる坂道です。東に坂を上り、ピークを過ぎて少し下ると出口町の信号です。左に5分ほどで地下鉄の荒畑駅です。

4

直線道の目指したもの

古代の直線道路の中には、遠くの山など直線の目標物があったことが知られています。これまで辿ってきた、①萱津から露橋までの直線や②露橋から御器所への直線には何かあったのでしょうか。

①の線については西北方向の伊吹山をチェックしましたが、北に少し外れていました。ところが逆向きの東南方向に、意外なものを見つけました。それは金山の高層ビル(金山南ビル)です。直線跡を写した写真の先に高層ビルが写っていたのです。もちろん目標物はビルではありません。前回紹介した、ビルの西北西すぐの所にあった元興寺です。同寺には30mを超える「塔」があったとされます。創建は7世紀中頃まで遡れるとありますから、道路建設よりもおそらく先行していたのでしょう。もちろん一つの仮説に過ぎませんが、名古屋の古代道路の夢はまた広がりました。

〈主な参考文献〉

- ①編集委員会『新修名古屋市史2』(1998、名古屋市)
- ②社会科教科会「昭和区の歴史」(1999、愛知県郷土資料刊行会)
- ③『愛知県中世城館跡調査報告』(1991、文化財図書館刊行会)